マルクス価値論における使用価値捨象の誤謬

（『松山大学論集』、第 13 巻 4 号、2001 年 10 月）

私は、マルクスの価値論における使用価値の捨象という誤謬が、かつてソ連、東欧諸国に存在した社会主義経済システムの瓦解という重大な結果を導いた、と考えている。

以下で明らかにする社会的使用価値論にもとづけば、社会は、社会成員の物質的・精神的欲望の具体的な態様を明確に把握することができなければ、それを満たすためのモノやサービスを計画的に生産することはできない。

ソ連・東欧諸国に見られた「社会主義計画経済」は、社会を代表する国家があらかじめ物質的・精神的欲望の社会的態様を決定し、それを充足するための社会的生産を計画的に組織しようとするものであった。物質的・精神的欲望の社会的態様を実際に制限することができるときにのみ、あるいは、社会的有用性を固定化せざるをえない非常時（戦争、内乱、自然災害等）にのみ、計画的生産、生産統制は可能となる。実際、物質的・精神的欲望の社会的態様が相対的に固定化されている「社会主義革命」直後の混乱期やその後の社会的生産基盤構築期、あるいは戦争遂行期には、「社会主義計画経済」は社会的生産基盤の充実、基礎的な生活物資の供給の点で効率的な資源配分を実現した。しかし、「社会主義計画経済」の有効性が確認できるのはこのような非平時の特殊な時期においてのみであった。平時においても計画経済を遂行しようとしたところに「社会主義計画経済」失敗の根本的な原因があったのである。

社会主義では、国家があらかじめ物質的・精神的欲望の社会的態様を決定し、それを充足するための社会的生産を計画的に組織するのであるから、社会成員のいかなる活動もその「社会的有用性」を保障されることになる。しかし、国家が決定した物質的・精神的欲望の社会的態様（計画目標）が人々の実際の物質的・精神的欲望の態様と異なる場合には、社会成員の活動の社会的有用性がアプリオリに保障されているとは到底いうことができない。否むしろ、無駄を排除するはずの計画的生産が壮大な社会的無駄を生み出す蓋然性は十分にある。このような場合、社会成員の「所得」は保障されるが、社会的生産が物質的・精神的欲望の態様に見合っていないのであるから、モノやサービスが不足し、国定価格の下では「行列」が恒常化し、「コネ」、「地位利用」、「袖の下」、「地下経済」などが横行することになるのである。現実に、ソ連型社会主義の瓦解前夜は、まさにこのような状態が極限に達した観があった。

本稿は、マルクスの価値論を振り返り、そこでなぜ使用価値が捨象されることになったのかを明らかにし、社会的使用価値論にもとづく価値規定を提起するものである。

１　マルクスの価値論

マルクスは、『資本論』第１部「資本の生産過程」第１篇「商品と貨幣」第１章「商品」第１節「商品の二つの要因――使用価値と価値（価値の実体、価値の大きさ）」において次のように述べている（本稿では、マルクス『資本論』社会科学研究所監修・資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、の訳文を参照・引用した）。

ある物の有用性（なんらかの種類の人間的欲求を満たす性質）は、その物を使用価値にする。しかし、この有用性は空中に浮かんでいるのではない。この有用性は、商品体の諸属性によって制約されており、商品体なしには実存しない。それゆえ、鉄、小麦、ダイヤモンドなどのような商品体そのものが、使用価値または財である。使用価値の考察にさいしては、１ダースの時計、１エレのリンネル、１トンの鉄などのようなその量的規定性がつねに前提されている。そして使用価値は、ただ使用または消費においてのみ、実現される。使用価値は、富の社会的形態がどのようなものであろうと、富の素材的内容をなしており、同時に交換価値の素材的担い手をなしている。

交換価値は、さしあたり、１つの種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち比率として現れる。それは、時と所とともに絶えず変動する関係である。それゆえ、交換価値は、なにか偶然的なもの、純粋に相対的なもののように見え、したがって、商品に内的な、内在的な、交換価値（“固有価値”）というものは、一つの“形容矛盾”に見える。

ある特定の商品、たとえば１クォーターの小麦は、ｘ量の靴墨、ｙ量の絹、ｚ量の金などと、要するにきわめてさまざまな比率で他の商品と交換される。だから、小麦は、ただ一つの交換価値をもっているのではなく、いろいろな交換価値をもっている。しかし、ｘ量の靴墨もｙ量の絹もｚ量の金なども、どれも１クォーターの小麦の交換価値であるから、ｘ量の靴墨、ｙ量の絹、ｚ量の金などは、互いに置き換えうる、または互いに等しい大きさの、諸交換価値でなければならない。それゆえ、第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの等しいものを表現する。しかし、第二に、交換価値は、一般にただ、それとは区別されるある内実の表現様式、「現象形態」

でしかありえない。
　さらに、それらのものの交換比率がどうであろうとも、この比率は、つねに、ある与えられた分量の小麦がどれだけかの分量の鉄に等置される一つの等式、たとえば、１クォーターの小麦＝ａツェントナーの鉄によって表されうる。この等式はなにを意味するか。それは、同じ大きさの１つの共通物が二つの異なった物のなかに、すなわち１クォーターの小麦のなかにもａツェントナーの鉄のなかにも、実存するということを意味する。したがって、両者は、それ自体としては一方でもなければ他方でもないある第三のものに等しい。両者はどちらも、それが交換価値である限り、この第三のものに還元されうるものでなければならない。
　この共通なものは、商品の幾何学的、物理学的、化学的、またはその他の自然的属性ではありえない。そもそも商品の物体的諸属性が問題になるのは、ただ、それらが商品を有用なものにし、したがって使用価値にする限りでのことである。ところが、他方、諸商品の交換関係を明白に特徴づけるものは、まさに諸商品の使用価値の捨象である。この交換関係の内部では、一つの使用価値は――それが適当な比率で存在していさえすれば――他のどの使用価値ともまったく同じものとして通用する。
　そこで、諸商品体の使用価値を度外視すれば、諸商品体にまだ残っているのは、一つの属性、すなわち労働生産物という属性だけである。しかし、労働生産物もまたすでにわれわれの手で変えられている。もしもわれわれが労働生産物の使用価値を捨象するならば、われわれは、労働生産物を使用価値にしている物体的諸成分と諸形態をも捨象しているのである。それはもはや、テーブル、家、糸、あるいはその他の有用物ではない。それはまた、もはや、指物労働、建築労働、紡績労働、あるいはその他の一定の生産的労働の生産物ではない。労働生産物の有用的性格とともに、労働生産物に表されている労働の有用的性格も消えうせ、したがってまた、これらの労働のさまざまな具体的形態も消えうせ、これらの労働は、もはや、互いに区別がなくなり、すべてことごとく、同じ人間的労働、すなわち抽象的人間労働に還元されている。
　かくして、これらの労働生産物に残っているものは、同じまぼろしのような対象性以外のなにものでもなく、区別のない人間的労働の、すなわちその支出の形態にはかかわりのない人間的労働力の支出の、単なる凝固体以外のなにものでもない。これらの物が表しているのは、もはやただ、それらの生産に人間的労働力が支出されており、人間的労働力が堆積されているということだけである。それらに共通な、この社会的実体の結晶として、これらの物は、価値――商品価値である。
　したがって、商品の交換関係または交換価値のうちにみずからを表している共通物、すべての商品のなかに共通にある「一つの共通物」とは、商品の価値なのであり、価値の実体は、商品に対象化されている抽象的人間的労働なのである。そして、商品の交換価値は、価値の表現様式または現象形態にほかならない。
　価値の実体は、商品に対象化または物質化されている抽象的人間的労働なのであるから、商品の価値量は、その商品に対象化されている抽象的人間的労働の分量によって決定されることになる。そして、労働そのものの量はまた、労働の継続時間によってはかられ、労働時間はまた、時間、日などのような一定の時間部分によって度量される。
　ところで、ある労働者が怠惰あるいは不熟練であるために、その労働者がある商品を生産するのに普通よりよけいに労働時間を費やした場合、その商品の価値量はそれだけ大きくなるのであろうか。価値の実体をなす労働は、すべて同等な人間的労働であり、同じ人間的労働力の支出である。だから、商品の価値に表示されるかぎりでは、社会の総労働力は、無数の個人的労働力からなりたっているとはいえ、同一の人間的労働力とみなされるのであり、またこれらの個人的労働力は、いずれも、それらが一つの社会的平均労働力という性格をもち、そのような社会的平均労働力として作用し、したがって、ある一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間だけを必要とするかぎりで、他の労働力と同じ人間的労働力なのである。それゆえ、商品の価値量は、その商品を生産するのに社会的に必要な労働時間によって規定されることになる。社会的に必要な労働時間とは、「現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するのに必要な労働時間」である、と。
　以上がマルクスの価値論の概要である。
　マルクスは、商品価値を考察するに当たって、商品交換の場に商品生産者のみを登場させ、商品交換がすでに成立していることを前提として、その交換の基礎になにが存在するかを探求した。そして、ｘ量の商品Ａとｙ量の商品Ｂの交換が成立している場合、商品Ａを生産した社会成員ａと商品Ｂを生産した社会成員ｂは、それぞれの商品ｘ量とｙ量を生産するためにそれぞれ等しい労働量を投下しているにちがいない、と考えた。ａが商品Ａを生産するために行った労働の具体的な形態（ａの個人的労働力の支出形態）とｂが商品Ｂを生産するために行った労働の具体的な形態（ｂの個人的労働力の支出形態）とは、当然異なっている。また、ｘ量の商品Ａを生産するためにａが費やした労働時間（ａの個人的労働力の支出量）とｙ量の商品Ｂを生産するためにｂが費やした労働時間（ｂの個人的労働力の支出量）も、やはり異なっている。にもかかわらず、マルクスは、それらの質的

同一性、無差別性、そしてそれらの量的同一性、無差別性を主張した。

マルクスは、いかにしてそれらの質的および量的同一性、無差別性を主張しえたのであろうか。

マルクスは、質的同一性、無差別性の根拠を、社会成員ａとｂはともに商品生産者であるという資質において同一かつ無差別な人間であり、したがって両者の行った労働の具体的な形態の相違にもかかわらず、両者の労働はともに商品を生産するために投下され、しかも商品の価値において表示されているという資質において同一かつ無差別な人間的労働である、ということに見出している。この根拠が正当化されうるためには、ａおよびｂがそれぞれ「同一かつ無差別な人間的労働」を投下して生産した商品Ａおよび商品Ｂ、明らかに使用価値の異なる商品Ａおよび商品Ｂについてもその質的同一性、無差別性が論証されなければならないが、マルクスは明示的にその論証を行っているわけではない。

量的同一性、無差別性については、物理的に異なった労働時間同士をなんらかの共通の尺度を用いて同一量に還元しうることが論証されなければならない。マルクスは、『資本論』第１部第１篇第１章第２節「商品に表される労働の二重性」において、「人間的労働力の支出」を「人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出」と規定し、「商品の価値に表される人間的労働自体の、人間的労働一般の支出」を「平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出」と規定している。ａおよびｂがともに「平均的に、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力」の所有者、すなわち「普通の人間」であるならば、ｘ量の商品Ａの生産に費やしたａの個人的労働時間とｙ量の商品Ｂの生産に費やしたｂの個人的労働時間とは物理的にぴったり一致するであろうが、このようなケースは特殊である。ａ、ｂがそれぞれ個体として個性的に発達することが人間社会の一般的なあり方であるとするならば、ａの個人的労働時間とｂの個人的労働時間が物理的に相違すると考える方がより自然であろう。その場合、ａ、ｂそれぞれの個人的労働力が「普通の人間の単純な労働力」に還元されなければならない。

この点に関連してマルクスは、「単純な平均労働そのものは、国を異にし文化史上の時代を異にすれば、その性格を変えるが、現に存在する一つの社会では、与えられている。より複雑な労働は、単純労働の何乗かされたもの、またはむしろ何倍かされたものとしてのみ通用し、そのために、より小さい分量の複雑労働がより大きい分量の単純労働に等しいことになる。この還元が絶えず行なわれていることは、経験が示している。ある商品はもっとも複雑な労働の生産物であるかもしれないが、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり、したがって、それ自身、一定分量の単純労働を表わすにすぎない。さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は、生産者たちの背後で一つの社会的過程によって確定され、したがって生産者たちにとっては慣習によって与えられるかのように見える」、と述べている。上記の例の場合、ａの個人的労働力とｂの個人的労働力がともに複雑労働力であるか、あるいはいずれか一方は単純な平均労働力で他方が複雑労働力であるかもしれないが、いずれにしてもそれらがどれだけの「単純な平均労働力」に相当するかは、マルクスによれば、「経験」、「一つの社会的過程」によって決まることになるという。

マルクスに従ってａ、ｂ両者間の商品交換の量的同一性、無差別性を確認しようとすれば、次のようになるであろう。まず初めに、商品Ａおよび商品Ｂの生産部門における「単純な平均労働力の支出量」、すなわちそれぞれの生産部門における「普通の人間」を特定し、さらに彼らが一定量の商品Ａおよび商品Ｂを生産するために費やす「脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出量」を、あるいは同じことだが、彼らの単位時間当たりの生産量を、特定する必要がある。そして、ａおよびｂが、あるいはいずれかが「普通の人間」ではない場合、当該の「複雑労働」における「脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出量」を、あるいは同じことだが、それぞれの単位時間当たりの生産量を測定し、それぞれが「普通の人間」の労働支出量あるいは生産量の同一倍数であることを確認する。マルクスは、このような換算が現実に行われていることは「経験」が示しているとしているが、それは「普通の人間」の「脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出量」が特定され、そして「複雑労働」における「脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出量」が測定されて、前者に対する後者の倍数が確認されるという作業に関してではなく、「普通の人間」の単位時間当たりの生産量と「複雑労働」の単位時間当たりの生産量との比較が「一つの社会的過程」として日常的に行われているという意味においてであろう。さまざまな種類の労働の「脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出量」なるものを測定することはおよそ不可能だからである。

マルクスの推論は、さまざまな種類の労働が投下されるさまざまな種類の生産部門において、それぞれの部門の「普通の人間」は単位時間当たり等しい価値を生み出す、あるいは等しい価値を持った商品を生産する、という前提があり、しかも「複雑労働」の「単純労働」への還元が絶えず行なわれていることを示す「経験」が実際に存在することによって初めてその正当性が保障されるであろう。しかし、このような前提と「経験」は、マルクスにあってはアプリオリに措定されていて、なんら論証ないし実証されているわけではない。

２　使用価値の捨象

マルクスが商品の価値規定を行うに当たって、労働生産物の有用的性格、労働生産物に表されている労働の有用的性格、したがって使用価値、を捨象していることは上で見たとおりであるが、重要なのは、彼がどのようにして使用価値を捨象しているかである。ここで、マルクスの価値論における使用価値捨象の筋道を追跡してみることにしよう。

『資本論』第１部第１篇第１章第１節の末尾でマルクスは次のように述べている。

商品を生産するためには、生産者は、使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値を、社会的使用価値を、生産しなければならない。そしてその生産物が現実に「商品になるためには、生産物は、それが使用価値として役立つ他人の手に、交換を通して移されなければならない」（括弧内の文章は第４版への注としてエンゲルスが挿入したものである）。最後に、どんな物も、使用対象（フランス語版では「有用物」）であることなしには、価値ではありえない。物が無用であれば、それに含まれている労働もまた無用であり、労働としては数えられず、したがってなんらの価値も形成しない。

同第４節「商品の物神的性格とその秘密」では次のように述べている。

労働生産物は、それらの交換の内部ではじめて、それらの互いに感性的に異なる使用対象性から分離された、社会的に同等な、価値対象性を受け取る。有用物と価値物とへの労働生産物のこの分裂がはじめて実際に発現するのは、有用物が交換をめあてに生産されるまでに、したがって、諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものにおいて考慮されるまでに、交換が十分な広がりと重要性とを獲得したときである（完全に発展した商品生産の成立）。この瞬間から、生産者たちの私的諸労働は、実際に、二重の社会的性格を受け取る。私的諸労働は、一面では、一定の有用的労働として一定の社会的欲望を満たさなければならず、そうすることによって、総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の、諸分肢として実証されなければならない。私的諸労働は、他面では、特殊的な有用的私的労働のどれもが、別の種類の有用的私的労働のどれとも交換されうるものであり、したがって、これらと等しいものとして通用する限りでのみ、それら自身の生産者たちの多様な欲求を満たす。互いに「まったく」異なる諸労働の同等性は、ただ、現実の不等性の捨象、諸労働が人間的労働力の支出として、抽象的人間的労働として、もっている共通な性格への還元においてしか、成り立ちえない。そして、互いに独立に営まれながら、しかも社会的分業の自然発生的な諸分肢として互いに全面的に依存し合っている私的諸労働が社会的に均斉のとれた基準に絶えず還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的でつねに動揺している交換比率を通して、それらの生産のために社会的に必要な労働時間が規制的な自然法則として強力的に自己を貫徹するからである。

さらに、第１部第１篇第２章「交換過程」でも次のように述べている。

商品交換（ｘ量の商品Ａ＝ｙ量の商品Ｂ）とは異なり、直接的な生産物の交換の形態は、ｘ量の使用対象Ａ＝ｙ量の使用対象Ｂである。ＡとＢという物は、ここでは、交換のまえには商品ではなく、交換を通してはじめて商品となる。ある使用対象が可能性から見て交換価値である最初の様式は、非使用対象としての、その所有者の直接的欲求を超える分量の使用価値としての、その定在である。物はそれ自体としては人間にとって外的なものであり、それゆえ譲渡されうるものである。諸物の量的交換比率は、さしあたりはまったく偶然的である。それらの物が交換されうるものであるのは、それらを互いに譲渡し合おうとする所有者たちの意志行為によってである。しかし、そのうちに、他人の使用対象にたいする欲求がしだいに固まってくる。交換の不断の反復は、交換を一つの規則的な社会的過程にする。それゆえ、時の経過とともに、労働生産物の少なくとも一部分は、意図的に交換めあてに生産されざるをえなくなる。この瞬間から、一面では、直接的必要のための諸物の有用性と交換のための諸物の有用性とのあいだの分離が確定する。諸物の使用価値は、諸物の交換価値から分離する。他面では、それらの物が交換され合う量的比率は、それらの物の生産そのものに依存するようになる。慣習はそれらの物を価値の大きさとして固定させる。

さらに、これと並行して進展する貨幣の生成過程についても次のように述べている。

直接的な生産物交換においては、その商品がその非所有者にとって使用価値である限りで、どの商品もその所有者にとっては直接的に交換手段であり、その所有者にとっては等価物である。したがって、交換品は、それ自身の使用価値、または交換者の個人的欲求から独立した価値形態をまだ受け取ってはいない。交換過程にはいり込む商品の数と多様性の増大とともに、さまざまな商品所有者のさまざまな商品がその交易の内部で同一の第三の種類の商品と交換され、価値として比較されるようになる。このような第三の商品は、他のさまざまな商品にとっての等価物となることによって、直接的に一般的または社会的な等価形態を受け取り、それは、商品交換の発展につれてもっぱら特殊な種類の商品に固着し、貨幣形態に結晶する、と。

以上から明らかなように、使用価値はマルクスの価値論において重要な位置づけを与えられている。これを敷衍すれば、次のようになるであろう。

商品の使用価値は他者（非所有者）の欲望を満たす性質であるが、この他者は不特定多数者を意味し、その欲

望は個人的な欲望ではない。商品交換という社会的な関係行為において現れる「欲望」とは社会的な欲望であり、それを満たすとはその商品が社会全体の欲望、したがって社会全体の必要を満たすもの（全商品）の一部を構成することを意味する。商品は他の商品との交換を通じて自らの使用価値が社会的な使用価値であったことを実証することになる。そして、当該商品の生産者は、自らの商品の交換（売買）が成立したことによってその活動が社会的に有用であったことを確認することになる。

全商品の生産には全社会的必要労働時間が費やされるのであるから、当該商品の生産には社会的必要労働時間の一部が費やされる。しかし、当該商品の生産者は商品生産に費やした自分の労働時間がどれだけの社会的必要労働時間であったかを知る術はない。当該商品の生産者は自分の商品が市場で他者に引き取られた、つまり実現されたという事実を通じて、その商品生産に費やした自分の労働が確かに社会的に必要な労働の一部をなしていたことを知ることになる。

そしてこの事実は、自分の仕事は社会にとって必要な仕事であった、自分という存在は社会にとって必要な存在である、したがって自分は他者の生産した商品を自分の生産した価値分だけ受け取る権利がある、ということを商品生産者に証明する極めて重要な事実なのである。別の言い方をすれば、それは社会成員のアイデンティティーを保障し、人間存在そのものを保障する根本事実なのである。

人間存在のこの根源的なレベルで事態を捉えるなら、商品生産とは商品を生産する仕事を通じて社会に貢献することを意味し、商品交換の成立は自分の仕事が何はともあれ社会にとって必要な仕事であったことを実証してくれると同時に、社会にとってどれだけ必要であったか、したがって社会から自分に必要なもの（商品）をどれだけ手に入れてよいかを知らせてくれる手段となる。

かくして、実現された価値（より正確には、第三の商品である貨幣との交換で表出された価値量＝価格）は、当該商品に費やされた労働時間がどれだけの社会的必要労働時間に相当するかを示すと同時に、当該商品の使用価値がどれだけの社会的使用価値に相当するかを示す指標となる。つまり、生産者の生産活動の質と量がその成果である当該商品の実現価値（価格）を通じて同時に評価（社会性の測定）されることになるのである。

使用価値が価値規定においてこのように重要な役割を果たすにもかかわらず、マルクスはなぜそれを価値論において捨象しえたのであろうか。

われわれは、マルクスが「直接的な生産物の交換」を分析しているのではなく、「有用物が交換をめあてに生産されるまでに、したがって、諸物の価値性格がすでにそれらの生産そのものにおいて考慮されるまでに、交換が十分な広がりと重要性とを獲得した」段階での「商品交換」を分析していることにまず留意しなければならない。そして、この「商品交換」の場には、商品生産者、すなわち「社会的使用価値を生産し、実際に交換を通して他人の手にその生産物を引き渡した人間」のみが登場し、その他の人間、すなわち「無用な物を生産し、無用な労働を行い、したがって社会的使用価値を生産せず、社会的労働としては数えられない労働を行い、したがってなんらの価値も形成しなかった人間」がはじめから排除されていることにも留意しなければならない。

マルクスの「商品交換」の場では、「交換の不断の反復」によって「他人の使用対象にたいする欲求」が固定化しており、したがってそこに現われる諸商品が社会的使用価値であることははじめから措定されている。つまり、諸生産物が自らを社会的使用価値であると主張し、そのことを交換の場で実証しようとする運動、闘争ははじめから排除されている。確かに、マルクスは、「私的諸労働は、一面では、一定の有用的労働として一定の社会的欲望を満たさなければならず、そうすることによって、総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の、諸分肢として実証されなければならない」と述べてはいる。しかし、彼の分析対象は、あくまでもｘ量の商品Ａ＝ｙ量の商品Ｂであって、ｘ量の使用対象Ａ＝ｙ量の使用対象Ｂではないのであるから、この指摘は明らかにマルクスの価値論の論旨と矛盾するものである。マルクスにあっては、「商品交換」がすでに成立しているということは、当該商品を生産した私的労働は一定の有用労働として一定の社会的欲望を満たしており、社会的総労働の一分肢としてすでに実証済みであるということを意味しているのである。

要するに、マルクスの価値論は、「商品交換」を分析するという議論の前提それ自体のなかにすでに実証済みの社会的使用価値を措定しているのであり、議論の枠組自体がはじめから使用価値の捨象を予定していたのである。したがって、マルクスは、その価値論においてなぜ使用価値が捨象されなければならないかを論証してはいない。

われわれは、マルクスの「生産者たちの私的諸労働は、実際に、二重の社会的性格を受け取る。私的諸労働は、一面では、一定の有用的労働として一定の社会的欲望を満たさなければならず、そうすることによって、総労働の、自然発生的な社会的分業の体制の、諸分肢として実証されなければならない。私的諸労働は、他面では、特殊的な有用的私的労働のどれもが、別の種類の有用的私的労働のどれとも交換されうるものであり、したがって、これらと等しいものとして通用する限りでのみ、それら自身の生産者たちの多様な欲求を満たす」という指摘の正当性と重要性に注目するとき、価値論における使用価値の捨象は誤謬であるとの結論に到達せざるをえない。われわれは、使用対象がすでに商品に転化している場、単なる使用対象の生産者がすでに商品生産者に転化して

いる場ではなく、使用対象が商品に転化する場、単なる使用対象の生産者が商品生産者に転化する場としての「商品交換」をこそ分析すべきであろう。

３　使用価値捨象の誤謬

先に、マルクスの価値論を検討した際に、交換が成立した商品を生産した生産者たちの私的諸労働の質的および量的同一性、無差別性をマルクスは十分に論証していないと指摘しておいた。

まず私的諸労働の質的同一性、無差別性については、マルクスは、商品生産者たちが「同一かつ無差別な人間労働」を投下したという点にその根拠を見出している。しかし、その結果である諸商品の質的同一性、無差別性についてまでは論じていない。この点が論証されないと、なぜ諸商品の交換が成立したのか詳らかにはならない。

商品交換とは、いうまでもなく、生産物がその生産者あるいは所有者の手から他の生産物あるいは貨幣との交換を通じて他者の手に移ることを意味する。このような交換が成立したのは、他者が何らかの欲求をその生産物を手に入れることによって満たすことができると考えたからであり、また実際、当該生産物が他者の欲求を充足する性質（社会的使用価値）を持っていたからである。

他人の使用対象にたいする欲求、したがって社会的使用価値の態様、がすでに固まっている社会状況、そして社会的分業における各社会成員の担当領域がすでに固まっている社会状況の下では、どの生産者も自分の生産した生産物が社会的使用価値を有しているかどうかを問題にする必要はなく、社会成員の一員として当該担当領域の労働を行ったということだけで「商品交換」成立の必要にして十分な条件を確保したことになる。この社会では、当該担当領域の労働を行うことが即自的に「同一かつ無差別な人間労働」を行うことを意味するからである。残っている問題は、当該生産者が「普通の人間」として「単純労働」を行ったのか、あるいはより高度な「複雑労働」を行ったのか、投下した労働量は「単純労働」に換算してどれだけになるのか、という量的側面に関する問題だけである。

しかし、他人の使用対象にたいする欲求がすでに固まっていると想定される社会状況はいかにも静態的かつ停滞的であり、特殊な歴史的諸条件の下では存在しえないことはないかもしれないが、現実的ではない。人々の欲求がダイナミックに変化する現実的な社会にあっては、人々の生産する生産物が交換の場で社会的使用価値として実証されるかどうかが人々の死活的に重要な関心事となる。ここでは、その社会的有用性が実証されない限り、私的労働は「同一かつ無差別な人間労働」であることを保障されない。自分は社会成員の一員であり、その資質において「同一かつ無差別な人間労働」を行ったのだといくら叫んだとしても、その生産物が社会的使用価値を有しない限りけっして「商品」とはなりえず、したがって他の商品あるいは貨幣との交換を達成することはできない。

要するに、その生産物の中に「同一かつ無差別な人間労働」が含まれているにもかかわらず、ある生産者の生産物は交換に成功し、したがって価値の実現に成功し、別の生産者の生産物は交換に失敗し、したがって価値の実現に失敗するという現実をいかに説明することができるのか。交換に成功する生産物には一様に社会的使用価値が含まれている、というまさにこの点にこそ私的諸労働の質的同一性、無差別性の根拠、そしてその結果である諸商品の質的同一性、無差別性の根拠を求めるべきである。これらの根拠は、使用価値の捨象を通してはけっして求めることはできない。

私的諸労働の量的同一性、無差別性については、先に、マルクスの推論は、さまざまな種類の労働が投下されるさまざまな種類の生産部門において、それぞれの部門の「普通の人間」は単位時間当たり等しい価値を生み出す、あるいは等しい価値を持った商品を生産する、という前提があり、しかも「複雑労働」の「単純労働」への還元が絶えず行なわれていることを示す「経験」が実際に存在することによって初めてその正当性が保障されるであろうが、このような前提と「経験」は、マルクスにあってはアプリオリに措定されていて、なんら論証ないし実証されているわけではない、と述べておいた。

ｘ量の商品Aとｙ量の商品Bとの交換、あるいはそれらとｚ量の貨幣（金）との交換が成立したと仮定して、以下の議論を進めよう。

商品Aは、具体的には、生産者ａ0、ａ1、ａ2……ａn がそれぞれ生産した商品A0、A1、A2……An からなり、生産者たちが単位時間当たりそれぞれx0 量、ｘ1 量、ｘ2 量……ｘn 量を生産したとしよう。商品Bについても、同様に、ｂ0、ｂ1、ｂ2……ｂn；B0、B1、B2……Bn；ｙ0 量、ｙ1 量、ｙ2 量……ｙn 量であったとしよう。そして、ａ0 およびｂ0 はそれぞれの部門の「単純労働」を行った「普通の人間」であり、それ以外はなんらかの「複雑労働」を行った人間であったとしよう。

マルクスの推論では、ｘ0 量の商品A0 の生産に費やされたａ0 の労働とｙ0 量の商品B0 の生産に費やされたｂ0 の労働とは、「平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な

労働力の支出」として、等しい価値を生み出した、つまりx0量の商品A0とy0量の商品B0はともに等しいz0量の貨幣と交換されたことになっている。要するに、a0の行う労働とb0の行う労働とは「同一かつ無差別の人間労働」であり、しかも単位時間当たり同じ価値を生み出すという側面においてもまったく同一かつ無差別の性質を有するものとみなされている。

マルクスの推論は、以下のような仮定が成立する社会ではその正当性が保障されるであろう。すなわち、社会成員たちがさまざまな欲望を持ち、それらを自分たちのさまざまな私的労働力の支出によって生産した生産物の交換を通じて充足する、そしてそのことを通じて社会とその成員たちの存続が確保される、という社会において、社会成員はすべて商品生産者であり、どの成員の労働も社会的欲望の充足にとって、したがって社会の存続にとって必要な生産物を生産する社会的に必要な労働である、という仮定が成立する社会である。このような社会では、どの労働が欠けても存続困難に陥るのであるから、「平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力」の所有者であるa0とb0の労働は、その具体的な支出形態が異なっていても、社会的に等しい価値を生み出す労働として認められるであろう。

ただしここには、a0、b0あるいはc0、d0、e0……などの生産した生産物がすべて社会的欲望の充足にとって不可欠である、すなわち、それらはすべて社会的使用価値を有している、という前提がある。

ところで、社会的使用価値とは実際のところ何を意味するのであろうか。
人間は、車がなくても、テレビがなくても、電話がなくても生きていける。人間は、バナナがなくても、肉がなくても、ケーキがなくても生きていける。しかし、人間は、バランスの取れた栄養素を含む一定カロリー以上の食物と水を摂取し続けないと生きていけない。

とはいえ、人間の生産活動と人間の生存条件との間には直接の関連はない。なぜなら人々は、それがなくても生きていけるモノやサービスを生産し、そのことによって社会的有用労働を行ったと主張することが現実に十分にありうるからである。実際、人々はそれがなくても生きていけるさまざまなモノ（この最たるものは兵器や奢侈品であろう）やサービスを生産しており、また生活者としてそのようなモノやサービスを購入するために貨幣を手放している。そして、この貨幣との交換が成立する限りで、それらのモノやサービスを生産する活動が「社会的に有用な」労働であったことが証明される。

社会は、どの活動が社会的に有用であるか、どの活動がそうでないかをあらかじめ決めることができるのであろうか。人々は、その活動が社会的に有用であると信じて、あるいは期待して活動を行う。しかし、それが社会的に有用であったかどうかは、あくまでも市場において事後的に、すなわち活動の成果である商品と貨幣との交換を通じて、決定される。貨幣との交換に失敗した「商品」、そしてそれを生産した活動は、社会的に不要な「商品」、社会的に不要な活動であったことになるが、これはあくまでも事後的にのみ判明する事柄である。

社会的有用性の予測不可能性は、社会的欲望の予測不可能性に由来する。物質的・精神的欲望は、人間が発達し、個性化する結果として、変化し、多様化するからである。その時々の物質的・精神的欲望の社会的態様は、したがって、市場における人々の現実的な交換行動を通じてのみ明らかになるのである。

社会的欲望のあり方が、そして社会的使用価値がこのようなものであるとすれば、先のマルクスの推論の正当性を保障する根拠は限りなく薄弱となる。社会成員の中には、社会成員として、したがって人間としてまさに「人間的労働力」を支出したにもかかわらず、他の成員は誰も自分の生産物との交換には応じてくれず、したがって自分の生産物を「商品」とすることができなかった成員が存在しており、しかもこの種の成員の中に「平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力」の所有者が含まれる蓋然性は一般的にきわめて高いからである。つまり、さまざまな生産部門における「普通の人間」を措定すること自体きわめて非現実的であるということになる。先の仮定に則していえば、a0、b0が特定できない以上、a1、a2……an；b1、b2……bnなどの「複雑労働」がそれに対して還元されるはずの肝心の「単純労働」を特定できないことになる。

また、たとえ特定できたとしても、生産者の投下労働量を体現する物理的な使用価値量と貨幣量（価格）との対応関係が一定ではない場合、すなわちa0、b0以外の生産者の投下労働がa0、b0の投下労働に還元されていることを明示的に表わす物理的指標が不在である場合、還元はどのように確認されるのであろうか。たとえば商品Aが成人男性用上着であり、x0＝5着、x1＝2着、x2＝3着……xn＝1着、そしてそれぞれ貨幣z0、z1、z2……zn（z0＜z1＜z2……＜zn）と交換された、あるいは、商品Bが腕時計であり、y0＝5個、y1＝2個、y2＝3個……yn＝1個、そしてそれぞれ貨幣z0、z1、z2……znと交換された、というような場合には、還元が絶えず行われているというマルクスの主張を「経験」的に、あるいは「一つの社会的過程」として確認することはほとんど不可能であろう。これにたいして、還元を確認することが可能なケースとして、物理的指標が存在する場合、たとえばA、Bがそれぞれ同じ素材から作られた同じ品質の商品であり、x0＝1着、x1＝2着、x2＝3着……xn＝n着、あるいはy0＝1個、y1＝2個、y2＝3個……yn＝n個、そしてそれ

ぞれ貨幣Ｚ0、Ｚ1、Ｚ2……Ｚn（Ｚ0＜Ｚ1＜Ｚ2……＜Ｚn）と交換された、というような場合を措定しうるが、現実的にはそれは一般的なケースであるとは考えにくい。もちろん、このようなことが起こるのは、社会的欲望の分類、商品の分類、そしてそれらの対応関係をどのように設定するのか、という問題に関連するが、マルクスの還元の実現可能性は、それらの、したがって生産部門、私的労働の種類の、限りない細分化を要求することになり、それゆえ還元が行われるという「社会的過程」を経験的に確認することは限りなく不可能になるであろう。

以上から明らかなように、マルクスの価値論はきわめて特殊な状況下での商品交換を想定しており、より一般的な商品交換を説明するには不十分である。その最大の問題点は、価値規定における使用価値の捨象にあった。そこで、社会的使用価値論の観点から、価値規定を整理し直してみよう。

商品の使用価値は他者（非所有者）の欲望を満たす性質であるが、商品交換という社会的な関係行為において現れる「欲望」とは社会的な欲望であるから、商品は商品交換を通じて自らの使用価値が社会的な使用価値であったことを実証することになる。そして、当該商品の生産者は、自らの商品の交換（売買）が成立したことによってその活動が社会的に有用であったことを確認することになる。

マルクス価値論の優れた点は、商品交換を人間の生産活動に関連づけて研究しているところにある。商品は物としては社会的使用価値を持っていなければならないが、そして商品交換においてそのことを実証することになるが、その社会的使用価値を生み出したのは当該商品生産者の生産活動なのであるから、商品交換の成立はその人間の生産活動の社会的有用性が実証されることをも意味する。マルクス的に表現すれば、当該商品生産者の労働時間が社会的必要労働時間の一部であったことが実証されるということである。とはいえ、当該商品生産者は、商品生産に費やした自分の労働時間がどれだけの社会的必要労働時間であったかを知る術はない。マルクスの価値形態論が明らかにしたように、商品の価値は貨幣との交換を通じて価格という現象形態を受け取る。そこで、当該商品生産者は、商品生産にこれこれの時間の社会的必要労働を投下したという代わりに、自分の労働はこれこれの貨幣量（価格）に相当する社会的必要労働であったというのである。

商品生産者は、その生産活動を通じて商品という社会的使用価値を生み出す。社会的使用価値の存在は商品交換において実証される。社会的使用価値の実証過程は、同時に商品生産者の生産活動の社会的有用性の実証過程でもある。商品交換の成立において明らかになる価格は、社会的使用価値の大きさを表すと同時に、商品生産者の生産活動の社会的評価の大きさをも表すことになる。

これが社会的使用価値論にもとづく商品の価値規定である。

社会主義が理想社会として構想され、社会主義運動・革命（労働者政党による政治権力の奪取）を経て、実際にソ連・東欧諸国、あるいは中国など一部アジア諸国、キューバなどで現実の政治・経済・社会体制として実存したのは、資本主義の下で、不況や恐慌が不断に発生し、社会的生産全体が麻痺し、その都度多くの人々が所得を手にすることができなくなって生活困難に陥る、そしてこのような状態を克服するために他の国々を侵略したり、戦争をしかける、という災厄的状況が何度も何度も繰り返されてきたからであった。資本主義の無政府的な生産の基礎には生産手段の私的資本主義的所有があり、この所有形態を廃絶し、生産手段の社会的所有を打ち立てれば、計画的生産は可能になるはずである、そして国家が社会全体の意思を代表して計画目標を設定し、それを実現するために計画的生産を組織すればいいではないか、と。マルクス的社会主議論である。

社会成員が生きていくためにはなんらかの所得を得なければならず、そのためには社会にとって有用な活動を行う必要があるが、自分の活動が社会的に有用であるかどうかはあくまでも事後的にしかわからず、予期せぬ市場の変化によってこれまで評価されてきた活動が一挙に評価されなくなってしまう危険性が常に存在し、働く意思も能力もあるのにどのように働けばよいのかわからなくなってしまう、人々の運命は市場に支配されている、というような資本主義経済の姿は、確かになんとかして改めるべきであろう。その際、社会的有用性の予測不可能性を前提として、したがって市場の存続を前提として、なおかつ人々の活動の社会的有用性を最大限保障するにはどうしたらよいかが問われる。ただし、社会的使用価値のあり方は、もとより社会のあり方、社会成員の肉体的・精神的・遺伝子的発達水準と発達方向、そしてそれらに規定される社会的欲望の態様を反映する。人類を何回も滅亡させうるほどの核兵器・通常兵器の累増、地球の危機を極限にまで高めつつある環境汚染・破壊の継続などは、生命系にとって無用以外のなにものでもないが、貨幣を対価として行われるまぎれもない人間の経済行為であり、大量の貨幣によって評価されるほどに「社会的に有用な生産活動」なのである。しかも、今日のグローバリゼーションの進展は、社会的使用価値をめぐる問題性をますます複雑化している。

人間社会の生命系からの乖離、人間の驕り、への反省、人間社会のあり方への反省、われわれはわれわれ自身へのこの真摯な反省を通じて社会的使用価値の発現の枠組を発見していかなければならない。それは、グローバル化への対応を図りつつ、参加する社会（市民社会的制御）への社会構造の改革、政治・行政システムの改革と経済システムの改革を結びつける新たな社会経済学への道であり、現代社会主義論の課題である。

（2001 年 10 月 26 日脱稿）